

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

中国 上海日本人学校高等部 教頭 松岡 一路

- 上海日本人学校高等部は、生徒数131名（2020年5月現在）、世界唯一の日本人学校高等部である。
「上海立地」「少人数」「総領事館・商工倶楽部・協力大学の支援」という3つの土台を活かして特色のある教育活動を行っている。
- 春節休暇に入ってすぐの2020年1月24日、上海市教育庁は市内のすべての学校の2月16日までの休校措置を通達した。
新型コロナウイルスの感染拡大の脅威が上海市にも迫っていた頃である。私たちはその通達に従い、その期間の休校を決定。
春節休暇中に日本に一時帰国をしていた生徒・保護者も多く、管理職は保護者向けの連絡対応に追われた。

- 1月31日にはWHOが「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言。外務省/危険レベル2（中国全土への渡航自粛要請）に引き上げとなった。春節休暇が終わった2月3日（月）は職員の勤務日である。しかし、職員間での感染拡大も懸念されるとして、当局より職員の在宅勤務が命令された。職員の出勤が著しく制限される中、生徒に対して春節休暇中の課題（宿題）に加え、休校期間2週間分の新たな課題を提供することとした。
- 幸いなことに、1年生、2年生全員にはロイロノートアプリという学習支援ツールを配布済であったため、それを活用して課題を各生徒に配信することとした。職員は日直当番のみが出勤できる状況であり、20名の職員は、2～3人ずつ時間差を設けて交替で出勤し、配布資料の作成やPDF化などを行い、自宅で課題を生徒向けに配信した。

- 2月10日に休校措置をさらに2月末まで延長すると当局より通知があった。2週間分の生徒への追加課題を準備しなければならない。
また、2月の末には後期期末考査の実施を予定していたが中止せざるを得なかった。定期考査を実施しないで、評価をすることを考えなければならない。
- 本校の評価・評定は定期考査の得点に加え生徒から提出された課題を点数化し、課題の提出状況なども考慮して、総合的に評価している。
しかし、今回はそれができない。各教科が期末考査に替わる評価点を算出、その評価点とこれまで（前期と後期中間）の評価点を総合判定して1年間通年の評価とした。
この評価方法に関しては生徒・保護者からの意見などはなかった。

- 2月末時点で、コロナウィルスの武漢での感染拡大のペースは鈍化していたが、上海でも感染の報告が相次ぎウィルスの脅威は迫っていた。休校措置は無制限とする旨の当局通知が出され、3月上旬に予定していた卒業式並びに修了式を中止することとした。
- 校長は予定していた卒業式の当日に卒業生に送るために用意した式辞を学校のHP上にアップした。
さらに翌日には、修了式のあいさつを在校生（1年生、2年生）向けに学校HPを通じて配信した。
日本に帰国していた本校生徒会長は、この困難な状況の中で頑張る卒業生や在校生にメッセージを送りたいと申し出てきた。その内容がとても勇気づけられるものであったので、卒業生に対するメッセージは学校HP上で、在校生に対するものはロイロノートを使って配信した。

- このころから日本でもウィルスによる感染拡大が懸念されるようになった。中国政府は日本から中国に入国する者に対して到着後2週間の隔離を求めるようになった。
時を同じくして日本政府も中国からの入国者を2週間隔離することを発表した。年度末で本校を退職し日本に帰任される先生方が、次の就職先の都合等で急遽帰任日を早めて帰国することとなった。在宅勤務が引き続き要請され、出勤が著しく制限されるなか、同僚にあいさつするひまもなく荷物をまとめてバタバタと帰国された。
- 最後まで残られた校長も3月18日に帰任となった。在宅勤務が要請される中、送別会を開くこともなく、空港への入場が搭乗者のみと著しく制限される中で見送りもかなわず、花束をわたすこともできなかった。

- 開校の目途はもちろん、新任の校長他3名の先生方の上海赴任について、まったく見通しがたたない中で、新年度を迎えることとなった。
4月からの教育活動については、オンラインで事実上スタートすることとした。課題の提供、回収、評価ということはロイロノートを利用してやってきたが、保護者の間で「課題をやるだけで大丈夫か。」という不安が高まってきた。
- 私は、保護者も生徒も先生の顔が見えることでより安心する。これまでの課題のやり取りに加えて授業動画の配信やオンライン会議システムを利用したの双方向授業をすることを提案した。
「我々には機材も設備も何もない、在宅勤務が求められる中でどうやってやるんだ。」等、最初は戸惑っていた先生方も、iPad一枚と教材を自宅に持ち帰り、困難な状況ながらオンライン授業に取り組んだ。

- 4月末となり上海の現地校の高3年生については開校が許可された。
他の校種・学年についても順次開校が許可されてきた。
本校においても教育局、衛生局などの検査に合格し、発熱者が出た場合の対応について、事前演習などを実施することを条件に開校許可を申請できることとなった。
- 開校に向けて4月24日に上海教育局による学校検査が行われた。
60の検査項目について本校が合格したのは22項目のみで、再検査が実施されることとなった。合格を目指して準備する一環として、5月7日、8日の両日に大規模な事前演習を行った。これは教員が総出で生徒役、教員役、保護者役を演じて入校時の体温チェックや、校舎内で発熱生徒が現れた事を想定して、隔離テントへの誘導や医師による体温測定、保護者への引き渡しを実地訓練するものである。

- 5月11日には区衛生局の学校検査、この時点では万全の準備が出来ていたので一発合格。5月14日に教育局による再検査が実施された。

「学校で確認される1人目の感染者は学校の責任ではない。

しかし学校内で感染防止対策が十分でなく1人目から2人目、3人目と感染を拡大させてしまうと、それは学校の責任だ。」と指導された。

- 5月20、21、22日の3日間に保護者に事前に来校していただき、生徒のパスポートチェックを行った。これは生徒が日本などの海外から上海に戻って2週間が経過していることを当局指導に基づき確認するものである。

また、生徒・職員ともに登校の前日夜と当日朝に自宅で体温チェックしなければならない。その体温チェック用紙や消毒液などを保護者に渡した。

- このような取り組みが実り、5月25日(月)に開校日を迎えた。
当日登校できたのは約半数の生徒51名であった。
残りの半数の生徒はまだ日本に滞在中で登校できない。
登校できない生徒に対して登校できる生徒と同レベルの
教育サービスをいかに提供するか。これからが正念場である。

以上